

石井 實 著：

『地と図——地理の風景——』

朝倉書店 1989年10月

B5判 175ページ 3,914円

本書は『地域を写す』（古今書院，1974）に続く、著者の2冊めの地理写真集である。また、一昨年に古今書院から刊行された『地理写真』が理論篇であるとすれば、本書は実践篇にあたるといえよう。

まず、本書の内容を簡単に紹介したい。本書はタイトルとも関連して、I. 地、II. 地と図、の二部構成となっている。Iは自然地理学的写真、IIは人文地理学的写真から構成されているが、内容の大部分を占めるのはIIであり、さらに1～5のモデルに細分されている。種々の景観の構成要素が付加されるにつれて、次第に複雑な景観が形成されていくありさまが、数多くの地理写真の実例として配列されている。

たとえば、モデルIIの2では自然環境に多くを依存する村落部の姿がとらえられ、また、モデルIIの3では比較写真地誌ともいべき構成がなされており、モデルIIの4では都市の景観変遷像が追求されている。最後のモデルIIの5では青山界隈を事例に、近年の急激に変貌する巨大都市東京の時の断面を地理写真に残そうとする意図がみられる。

巻末には数人のエッセイと著者のあとがきが記されているが、本書の大きな特色は、これらを含めて、写真の説明文や地名がすべて英文に対訳されており、国際的に通用する地理写真集となっていることである。

さて、写真集の書評とはいえ、とても個々の写真を評する余裕もないので、最近、ある絵図集の編集に加わった体験から、絵図集と写真集の相違について述べてみたい。

絵図と写真は、共に現実の景観を2次元平面に変換した資料であるという共通点を有している。しかし、絵図の場合は歴史的遺産であるという制約上、絵図集に収録できる点数は限られており、とりわけ中世～近世初期の絵図は、そう新発見があるものではない。

それに対し、写真集の場合は、膨大な写真のコレクションの中から掲載する写真を選定することがたいへんな作業となる。とりわけ写真歴が半世紀近く

に及ぶ著者の場合は苦勞が多かったことと想像される。また、絵図集とはちがって、写真集の場合は写真の選定を撮影者自らが行なう自選となるわけであるが、著者の意図は徹底する反面、もっと多くの写真を見たいと感じる読者の不満も生じるのではなからうか。著者はあとがきの中で、解説は少なくしたので、なるべく写真そのものを読んでほしい旨を述べているが、どうしても写真集の量的限界と競合してしまい結果となる。たとえば、モデルIIの4の新宿の部分のように、できるだけ多くの写真を出そうとすれば、一点当たりのスペースが小さくなってしまい、読者に見づらいものとなる矛盾が生じるわけである。

また、写真が地理学の研究と教育にさほど活用されてこなかった背景には、自分で写した写真を使うべきで、他人の写真はいわば二次資料であるという先入観があったのではなからうか。しかし、地理写真は芸術写真とは異なり、客観性を有する資料であり、著作権等の問題もあろうが、もっと広く学界で利用されるべきものである。過去の景観を写し込んだ地理写真は、今後、近代歴史地理学にとって不可欠の資料となってくるはずである。

もちろん、この点について著者が手をこまねいているわけではなく、昨秋の日本地理学会・人文地理学会合同大会において、「地理写真データベースの設計について」と題する研究発表をされている。学術文献や古文書等のデータベース化が昨今盛んに行われているが、ぜひ地理写真のデータベース化も早急に実現させていただきたいものである。

さらに、フロッピーディスクカメラが実用化された今、近い将来にフロッピーディスクあるいはCD写真集が出現することも夢ではなからう。一枚のCDに膨大な量の地理写真とそのデータが収められれば、研究・教育面での活用も飛躍的に改善されることになるだろう。

大学入試センター試験の地理の問題にも写真が取りあげられるようになったが、学界を挙げて、地理写真のデータベース化を促進してほしいものである。地図博物館を設立してほしいとの学界の要望が強いようだが、ぜひそこで扱う資料の中に地理写真も加えていただくように切望して紹介を終えたい。

（岩鼻通明）